

# 体育教師の社会的地位に関する研究 ( I )

—高校生をもつ父兄による評価—\*

岡田 猛\*\*・武隈 晃\*\*\*・尾塚 浩明\*\*\*\*

On the Social Status of the Physical Education Teacher ( I )  
; Grading on side of Parents of Senior High School Students

Takeshi OKADA Akira TAKEKUMA Hiroaki OTSUKA

## ABSTRACT

This paper explores how senior high school teachers are graded by students' parents. Some of points which come clear are as follows ;

1)The teacher as profession is graded moderately among thirteen professions. In dividing the teacher into elementary, secondary and high school teacher, the higher the school level is, the higher the prestige of the teacher as profession is.

2)In contrasting by subjects, the physical education teacher is graded fifthly among nine subject teachers. Probably this result reflects that the subjects of investigation contain the physical education course's parents.

3)It is analyzed what factors the prestige of physical education teacher is influenced by. There are three factors that are significant at 0.1% level.

a)Parent's attitude toward extracurricular club and child's participation ; both categories "parent positive and child not participant" and "parent negative and child participant", that is, the categories being contradictory between parent and child contribute to the lower prestige of physical education teacher.

By contrast, the category "parent positive and child participant" contributes to the

---

\*本研究の一部は昭和61年度文部省科学研究費補助金(一般研究C, 課題番号61580113)の援助を得て行われた

\*\*鹿児島大学教育学部体育科(体育原理・体育社会学)

\*\*\*鹿児島大学教育学部体育科(体育経営学)

\*\*\*\*鹿児島県垂水市立水之上小学校

higher prestige, but the degree is not intensive.

b) Course ; the public, physical education course contributes to the higher prestige of physical education teacher intensively.

The public, general course contributes to the moderately low prestige and the public, vocational course contributes to the moderately high prestige respectively.

c) Age ; With the exception of fifty-one to sixty, the tendency is ascertained that the older the age is, the lower the prestige of the physical education teacher is.

### はじめに

藤森成吉の手になる「ある体操教師の死」という小説がある<sup>1)</sup>。大正11年に発表された、旧制中学の一人の体操教師を題材にしたもので、おそらく作者の経験を踏まえて書かれたであろうと思われる。

体操教師木尾先生はいつもすこぶる風采のあがらない容貌、服装をしていた。しかし先生はすべての生徒指導において生真面目で厳格、熱心であり、体操の指導においてはあらゆる教材についてみずから示範を示さないでは済ませないほどであった。当時の内容が教練や器械体操であっただけに、厳格、熱心であればある程ベッカァ(きつつき)とあだなされる程の生徒の反撥を招いたものの、木尾先生は「今たとえどんなでも、学校を出てからきつと自分に感謝するだろう」と信じて疑うところがなかった。

ところが、40歳を過ぎる頃から体力・気力が急激に衰え、示範においても失敗をするようになった先生はいたたまれずに学校を退き、「あの人だで、今頃地獄へ行って体操をやっているか」という生徒達の戯談を残して、早死にしてしまう。

と、このようなストーリーであるが、ここには職務に忠実であろうとする体操教師に対して当時の社会・教育体制がもたらす矛盾・軋轢、教師への生徒の評価におけるその反映、といったことがら手際よく描かれている。戦前における教科としての体育や体育教師のおかれた立場や状況を推察させるものであろう。

ところで、戦後の教育改革は、体育に対してその内容や方法において革命的变化をもたらしたといつてよいであろう。当時から今日までその渦中にあり常に第一線に身を置いてきた宇土正彦は戦後体育授業史を、「昭和30年前後から確実に教育の方向と方法を確立しはじめ、いままた新しい段階を迎えて充実度を増している体育科教育と体育教師<sup>2)</sup>」として振り返っているが、氏によるその後の生々しい報告によればまさに当を得た総括であると同意できるのである。学校の授業としての体育は大筋において望ましい変遷をたどってきたし、体育教師も自らの研鑽によってその資質・能力を高めてきたことは疑いえない事実であろう。

さて、このような教科内容や教師資質の充実・向上は、職業としての体育教師の社会的地位の向上にどれ程つながっているであろうか。一般的にいて、ある職業の地位は、その職を占める人々の資質や能力の向上に伴って高まるであろうと考えられる。そういう意味では、職業としての体育教師の地位も改善されてきていると思われるがどうであろうか。

ところで、職業の社会的地位となると、当該就職者の資質・能力の向上に直線的に対応するものでないこともまた確かであろう。木尾先生に代表されるような体育のあり方は当時の人々の心の奥深く刻み込まれ、職業としての今日の体育教師の評価にあたって過去の経験は尾をひかざるを得ないからである。

このように職業の社会的地位は歴史的な制約のなかにもおかれているのである。

これまでの体育教師の議論はそのほとんどが、識者の被教育体験に基づいた評論であったり、体育を専門としてきた者の信念の表明であったり、教育理念から導かれた演繹的当為の開示であったようである。これはこれとして、今後の体育教師のあり方を考える上で貴重な示唆を与えてくれることは間違いないが、他方で実際に職業としての体育教師の社会的地位はどのようになっているのか、実証的に解明することも欠かせないであろう。そしてこのいわば診断が最終的な結果のみでなく、それと同時に職業としての体育教師の社会的地位を今日あるものにあらしめている意識的、社会的背景が多面的、重層的に示されるなら、われわれは今後の体育教師の社会的地位の向上に対する指針と具体的な手がかりをつかむことができるであろう。

以上に述べてきた意図に基づいて、われわれは本研究において高校生をもつ父兄の体育教師に対する職業的評定を、それを規定する諸々の要因とともに調査・分析することとした。後に示すように、今回の調査は標本数において決して十分なものではないが、今後に予定されている体育教師の社会的地位についての一連の系統的調査・研究のための仮説構成や調査枠組みの構築の手がかりという意味も含めて、以下において論述を展開することとしたい。

## 方 法

鹿児島市から公立高校・体育科、私立高校・普通科、鹿児島県内地方都市から公立高校・職業科、同普通科に在籍している生徒の父兄を対象にして、質問紙法により調査を実施した。調査用紙の配布・回収は担任教師により生徒を介して行われた。

調査時点は1985年12月である。

回答者の主な属性は以下の表に示した通りである。

表1 回答者の主な属性(人)

性(親)	性(子)	校 種	年 齢	学 歴	職 業
男 141	男 78	公・体 34	35~40 26	中学 61	教員・公務員 22
		私・普 33	41~45 93	高校 101	会 社 員 64
女 86	女 144	公・職 55	46~50 78	大学 56	農・漁業 37
		公・普 105	51~60 29		商・工、サービス業 38
					主 婦 38
					そ の 他 28

## 結果と考察

### I-1 教師の職業的地位

教師という職業は他の職業に比べてどのような評定を受けているのであろうか。ここでは、先行調査の結果も参考にしながら、比較対象として他に12の職業をとりあげた。ただここで一工夫を凝らしたのは、教師を学校段階別に「小学校教師」「中学校教師」「高校教師」に分けて示したことである。

われわれは、先行調査にみられるように、職業の評定において「教師」として、あるいはその一つの下位カテゴリーとしての「小学校教師」として示したのでは不十分ではないのか、教師はその地位と役割の分化を反映して職業の評定においてもかなり分化しているのではないのかと考えたのである。地位、役割分化の基準の一つとして学校段階をとりあげようというわけである。そして「教師」の評定は、ここでは便宜的に小、中、高の三教師の平均をもってあててことにした。

表2 職業の評定(全体)

職業	平均	順位
弁護士	2.7	(1)
国会議員	3.1	(2)
医者	3.3	(3)
社長・重役	4.9	(4)
高校教師	6.4	(5)
技術者	6.7	(6)
教師	7.3	6.5
中学教師	7.3	(7)
新聞記者	7.9	(8)
小学教師	8.0	(9)
プログラマー	10.0	(10)
プロ野球・芸能人	10.4	(11)
農家	11.1	(12)
バスの運転手	12.4	(13)
米屋	12.6	(14)
自動車セールスマン	12.9	(15)

以上の意図からとりあげられた15の職業に対して、地位が高いと思われるものから順に15番まで番号をつけてもらい、地位の指標とした。その際、評定はその為の基準を全く統制せず、評定者の自由な判断に委ねられた。表2の数字は与えられた順位の平均値であり、( )内はその順位を示したものである。

予想されたように、学校段階による教師の職業的評定には明らかな差異がみられる。差異の傾向は、小学校(9位)から中学校(7位)、中学校から高校(5位)へと、学校段階が上昇するにつれて評定も順位を上げていっており、その差異は、それぞれの間にも別の職業、新聞記者、技術者を挟む程のものである。職業としての教師の評定にあたって学校段階はその下位カテゴリー化の基準として有効であることを認めてよいように思われる。

さて、教師を含めた職業の評定についてはわれわれは既に行われた幾つかの先行調査に接することができる。

最も新しい調査に1975年に行われたSSM調査がある。

これは日本全国20歳以上70歳未満の男子から抽出した1296人の対象者を面接法を用いて調査した大がかりな研究であり、具体的に82の職業をあげ、それぞれの職業に対して<1 最も高い>から<5 最も低い>の五段階尺度で評定させ、その平均によって職業の威信を示したものである。

職業中、教師に関しては「小学校の教諭」といわゆる従業上の地位にあたる「小中学校の校長」をあげているが、「小学校の教諭」は82職業中18位、「小中学校の校長」は9位を占めている。「小学校の教諭」は今回の調査に比べると高く評定されているようであるが、ただわれわれの調査にお

いて小学校教師の上下に評定されている職業が一つを除いて入れ替わっていないところを見ると、このような違いは職業のリスト構成の差によると考えてよさそうである<sup>3)</sup>。

同じく1955年に日本社会学会で取り組まれた最初の本格的なSSM調査においても、「教諭」は32職業中7位を占めているが、そのハイアラーキーの内容においては'75年調査とほぼ同じような構成を示しており、本調査結果とそれ程異なるものではない<sup>4)</sup>。

このように、先行調査における結果と比べてみると、リストアップされた職業の中に占める「教師」の相対的な順位に違いはみられるものの、「教師」を軸とした上下の職業の種類に大きな違いがみられないところから、それはほとんど職業のリスト構成の仕方によるものであると考えられる。

学校段階を基準にした下位カテゴリー化が、教師の職業的評定をより分析的に明らかにする上で意義の認められたことは強調されてよいであろう。

### I-2 評定の基準と教師の職業的地位

これまでにみてきた職業評定は、特定の基準を示すことなしに、自由に評定がなされた結果であった。しかしながら、その際には評定者の内部に存在するであろうさまざまな評定者に固有の基準が意識的、無意識的に動員されたはずである。

職業を評定する場合にそれは何を基準にしてなされているであろうか。このような基準は社会や時代、階層により異なっているであろうし、生活の土台に位置づく職業の評定であるだけに、この基準は人々にとっての支配的な価値観を明るみに出すことになるであろう。結果としての職業的地位の解明におとらず重要な意味をもっているように思われる。

本調査では職業評定に続けて、評定にあたってどのような基準が重視されたのかについて尋ねている。示された基準は、「その職業から得られる収入の多さ」「その職業が必要とする特別の能力」

「その職業に与えられる社会的尊敬」「その職業が必要とする教育程度」「その職業の社会的緊要度（社会的に必要で欠かせない）」の五つである。

表3 職業評定の基準

収入の多さ	特別の能力	社会的尊敬	教育程度	社会的緊要度
15人 6.7%	59 26.6	87 39.2	8 3.6	53 23.9

表3によると、39.2%の父兄が「社会的尊敬」を選び、「特別の能力」(26.6%)、「社会的緊要度」(23.9%)と

続き、「収入の多さ」(6.7%)、「教育程度」(3.6%)は少ない。

今日の学歴社会を思うとき「教育程度」の少なさは意外にも思えるが、これは「社会的尊敬」など、多くの選択を受けた基準をみたす職業に就くための手段的価値であるとみられているためであろう。したがって択一式でなく、多肢選択の形をとれば結果は随分違ってきたであろうと考えられる。

「特別の能力」の意味する個人的資質・能力のみでなく、「社会的尊敬」「社会的緊要度」に示される社会的視点を多くの父兄が保持していることに注目しておきたい。

さて、このような基準のうちでどれを重視するかによって職業の評定も異なってくると考えられ

るが、その関係を示したのが表4である。

表4 基準別にみた職業の評定(順位)

	全体	評定の基準				
		収入	能力	尊敬	教育	緊要
弁護士	1	1	1	2	1	1
国会議員	2	2	3	1	3	3
医者	3	3	2	3	1	2
社長・重役	4	4	4	4	4	4
高校教師	5	6	6	5	5	5
技術者	6	5	5	6	6	7
教師	6.5	8.5	6.5	7.5	8.5	5.5
中学教師	7	9	7	7	8	6
新聞記者	8	10	9	8	7	9
小学教師	9	11	8	9	10	8
プログラマー	10	8	11	11	9	11
プロ野球・芸人	11	7	13	10	12	12
農家	12	14	10	12	13	10
バスの運転手	13	13	12	13	15	14
米屋	14	14	14	14	13	13
自動車セールスマン	15	12	15	15	11	15

表中に示した数字は、選んだ基準毎のグループによる評定の平均値の順位である。

順位を横にみていって、職業毎の基準の相対的なウェイトについての主な特徴点を記してみよう。

- 医者は「教育程度」が他の基準より評定が高い
- 教師は「収入」と「教育程度」が他の基準に比べて評定が低い
- 中学教師は「収入」が他の基準より低く評定されている
- 新聞記者は「収入」が他の基準より評定が低い
- 小学校教師は「収入」が他の基準より評定が低い
- プログラマーは「収入」が他の基準より評定が高い
- プロ野球・芸人は、他の基準に比べて「収入」が高く、逆に「特別の能力」が低い
- 農家は他の基準に比べて「収入」の評定が低く、「特別の能力」「社会的緊要度」が高い
- バスの運転手は「教育程度」の評定が他の基準より低い
- 自動車セールスマンは「収入」「教育程度」が他の基準に比べて高く評定されている

特に教師関係について目につくのは「収入」の評定の低さであろう。大橋はこれまでの教育条件が「教職を表面的価値において権威づけ実質的価値において軽蔑に導く、二重性格をもった職業」に成型してきたと述べているが<sup>5)</sup>、実質的価値についての指摘は実証されたということになるであろう。

## Ⅱ-1 高校教師に対する父兄の態度

教師の職業的地位をみる場合、「教師」として一括したのではその実態を必ずしも精確に描き出し得ないのではないか、という観点から、小学校、中学校、高校という「学校段階」による職業的地位の分化については既にみてきた通りである。ところで、その他に、教師の職業的地位の分化を規定する要因として担当する教科をあげることができるであろう。

今日の日本においては、学校段階でいえば原則として中学校以上において教科担当制をとっているし、小学校においても、音楽、美術、体育などの教科を専門に担当する措置がとられるようになってきている。

そもそも教科とは、社会において歴史的に蓄積されてきた科学、技術、芸術、価値信念体系など、総じて文化といわれるものがそのもつ種々の特性に応じて分割されたものを内容として成立していると考えられる。そしてそれらの内容は、「職業評定の基準」としてとりあげられたような項目などによって様々に価値づけられ、さらにその評定体系も社会、時代により一定ではあり得ないであろう。このように、教科内容についての様々な観点からの評定の社会的、時代的な差異は、それを専門として担当する教師の職務の形態や活動様式などを規定するであろうし、ひいては職業的評定に反映してこざるを得ないであろう。

さて、本調査においては、子どもを高校に通わせている父兄を対象にしている。今日では高校に90%以上が進学して準義務教育的様相を実質的に呈しつつあり、高校卒業後の進路が人生航路の分岐点を形成しているといえるであろう。受験体制の激化がその影響を低年齢まで及ぼしつつあるとはいえ、というよりもそれだけに一層、高校教育はその総決算として位置づけられるようになるであろうし、それだけに高校生をもつ父兄の高校教育に寄せる関心には特別のものがあると考えられる。

ところで、以上に述べた同じ事情から調査方法に一種の制約も抱え込まざるを得なかった。この種の教育調査固有の困難性に加えて、今回の調査においては学級の担任により生徒を介して父兄に調査票を配布・回収するという手続きをとらざるを得なかったため、被調査者としての父兄にとっては回答に際して抵抗が少なからず存在することは否めないと思われたからである。そこで回答における抵抗をできるだけ減ずるために以下にみるように、高校教師の職業的評定に関する設問は間接的な聞き方、つまり、子どもの高校教師志望に対する父兄の態度を尋ねるという方法によらざるを得なかったのである。

さて、調査においてはまず高校教師にどのようなタイプを望んでいるのかを尋ねてみた。この点は戦後の教育労働運動における争点であり続けた問題でもある。

調査対象者にとってあるいはなじみのない項目であるかもしれないということを考え、調査用紙ではそれぞれの項目に次のような注記をつけている。

〈労働者型〉 教師も労働者であるから定められた時間だけ働けばよいとする型

〈聖職型〉 教育することを天職と考え、生徒のためなら利害をこえて仕事をする型

〈専門職型〉 教師は医者や技術者のように教育について専門的な技術や教養を持っている型  
結果は、表5にみられるように聖職型が60%にのぼり、専門職が37.5%と続いて両方で圧倒的部分を占めている。労働者型を望む父兄はわずか3%である。これはわれわれの以前の調査結果ともほとんど変わるところがない<sup>6)</sup>。

子どもを高校に通わせる父兄の立場からすれば、このような傾向がでてくるのは当然とも思えるのであり、したがってこれで全体的傾向を類推することは慎まなければならない。

さて、「もし、あなたのお子さんが高校教師になりたいと言ってきたらあなたはどのようにしますか」という設問に対する回答による、高校教師に対する評価をみてみよう。

表6にみられるように、子どもの高校教師への就職に反対とする父兄は回答者の9.7%であり、過半数(57.5%)が賛成している。

態度保留の「わからない」32.8%を含めて考えると、子どもの就職先として高校教師は父兄から高い評価を受けているとあってよい。先に、15種の職業の比較のなかで高校教師は5位の評定を受けているのをみたが、同様の傾向を示したものといえよう<sup>7)</sup>。

表5 高校教師に望まれるタイプ

労働者型	聖職型	専門職型	その他
2.7%	59.8	37.5	0.5

表6 子の高校教師志望に対する父兄の態度

賛成	反対	わからない
130人	22	74
57.5%	9.7	32.8

## II-2 教師における体育教師の職業的地位

子どもの高校教師志望に「賛成」する父兄に限定して、どのような教科の担当者になることを希望するのか、具体的に9つの教科をあげ希望する順に番号をつけてもらった。教師の下位カテゴリーとしての担当教科による教師の職業的地位の構造を明らかにしようというわけである。

表7は父兄によって教科毎につけられた順位の平均値と、その平均値に基づいた順位を示したものである。

表7 担当教科別の評定平均と順位

		国語	英語	数学	社会	体育	理科	技・家	音楽	美術
全	平均	3.31	3.47	3.65	4.21	4.76	5.28	6.54	6.66	6.67
体	順位	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)

体育は、国語、英語、数学、社会について第5位を占め、理科、技術、家庭、音楽、美術に先んじている。

体育が大学受験教科理科を上回る程の位置を与えられているのは、調査対象に体育コースが含ま



れていることによるのであろう。そのことを配慮すれば、受験教科担当教師はその職業を高く評定され、非受験教科担当教師は低く評定されているということが一般的にいえるようである<sup>8)</sup>。

父兄のもつ属性によって教科間の位置関係は変動してくると思われるが、その点については後で詳しくみることにしよう。

次に、今度は少し視点を変えて、子どもの学級担任というものをフィルターにして教科担当教師間の職業的ヒエラルキーをみてみることにしよう。教科担当制を原則とする高校においては、学級担任制を原則とする小学校ほど、学習指導における学級担任の占める比重は高くないにしても、進路指導などの別の側面を含めた役割については父兄も少なからぬ関心を寄せているのではないかと予想されたのである。

子どもの担任について「気にする」か、気になるとすればそれはどのような事であるのか、を質問したが、その結果は表8に示す通りである。

表にみられるように過半数の56%が気にしないと答えしており、高校における学級担任は父兄の過半の関心を呼ぶ存在とはなっていないようである。

それでは、気にすると答えた44%の父兄は何を気にしているのであろうか。これは圧倒的に教師の性格である。それに対してどの教科を担当しているのかという事は全体の8%に留まり、記録や業績、出身大学についてはほとんど父兄の気に留めるところとはなっていない。

一般的に、高校における学級担任は多くの父兄からは意に介されてはおらず、三分の一程度の人々からその性格について関心がもたれているのであるが、これは受験体制の浸透のもとにおける学級指導における訓育面での期待が大きいからであろう。

以上の傾向については、われわれが、以前に実施した調査においても既に確認しているところである<sup>9)</sup>。

このように、学級担任において彼がどの教科の担当の教師であるかという事は大方の気をひくところとはなっていない。本調査において担当教科を選んだ対象者が18人と少ないということであくまでも参考の域を出るものではないけれども、調査の目的からして今後の調査の参考のために、この点をさらにつっこんでみておきたい。

表9は、該当者18人によって学級担任として望まれる担当教科間の評定の平均値と、その順位を示したものである。

表8 担任教師を気にするか

気にしない	気にする	内訳	
125人	99	性格	33%
		担当教科	8
56%	44	記録や業績	2
		出身大学	1

表9 学級担任としての教科担当別評定平均と順位

教科	数学	国語	英語	社会	理科	体育	音楽	美術	技・家
平均	2.2	2.7	2.9	4.1	4.7	5.8	6.6	7.1	7.7
順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9

子どもの高校教師志望に対する父兄の希望教科についての結果と比べてみて、個々の教科の間における入れ替えはあるものの、体育が理科と入れ替わり、全体として受験教科と非受験教科に大別され、前者に高い評定がなされているのが目立つ点であろう。体育は非受験教科にあって相対的に高く評定されている<sup>10)</sup>。

### II-3 父兄の属性による教科間比較

教科間の職業的評定の全体的結果については既にみたところである。しかしながらこの評定は、調査対象者である父兄の直接的、間接的属性によって異なってくることが考えられる。表10は各種属性による評定の教科間比較について分析した結果の一覧である。

表には評定の平均値とその順位を示しているが、ここでは便宜的に順位における差が2位以上離れている点を目途にして、以下特徴を記してみよう。

父兄の性：教科の評定順位に差のみられるのは音楽である。男性は女性より低い。

父兄の学歴：受験科目において差がみられる。英語、理科は中学で低く、高校で最も高く(1位)評定され同様のパターンを示している。数学、社会では中学が最も高い。

学校種：きわだっているのは公・体である。体育を1位に押し上げ受験科目の中から英語を6位に下げている。各教科とも学校種による変動の大きいなかで、数学、社会、理科の安定性が目をひく。

子の性：体育の男性1位、女性6位を初めとして、全体的に性別による変動は大きい。教科毎の説明は表に譲りたいと思うが、概して男子に全体的傾向と異なる特徴が強くでているようである。

職業評定の基準：教科毎にみていこう。

国語は「緊要度」を除いて高く評価されている。

英語では「収入」が相対的に低い。

社会は基準の違いによる差異はほとんどみられない。

体育は「緊要」において相対的に高く評定されている。

理科は「収入」の点において他の基準よりも高く評定されている。

技術・家庭は「能力」が他より低く評定されている。

音楽は「教育」「緊要」が低い。

美術においては基準の間に大きな差はない。

<おしなべて「尊敬」が全体の結果とそっくりそのまま同じ順位を保っており、教科間における評定基準としての同項目の重要性を窺わせる。>

望ましいタイプ：英語で「労働」、技術・家庭で「聖職」が幾分高く、美術で「聖職」が若干低くなっている。

全体的にタイプ間における大きな違いはないようである。



担任について：「気に入る」において音楽が高く、「気にしない」において美術が高くなっていること以外では差がみられない。

年齢：年齢の増減に直線的に対応して評定が変わるという教科は見当たらないようである。年齢階級間で目立つのは、英語-41~45>51~60-, 社会-51~60>41~45-, 音楽-35~40>その他-, といったところであろう。

### Ⅲ 体育教師の評定を規定する要因の多変量分析

これまでの分析で明らかになったように、体育教師は9つの教科担当教師の間で5位か6位、受験教科と非受験教科の間にほぼ評定されている。ところでこれは全体を一つの指標にまとめた結果なのであって、人によってもっと上位、あるいは下位に評定されるのはいうまでもない。

体育教師の職業的地位を他の諸要因との関わりの中だけでもっと分析的、多面的にみない限りはその実相は浮かび上がってはこないし、したがってその地位を向上させるための具体的な方策や指針も明らかになってはこない。

このような課題を解明するために、ここでは調査対象者である父兄を、体育を9教科中1位から5位の間に評定した67人、6位から9位に評定した54人の二グループに分割し、両グループに入る父兄がどのような点において相互に異なっているのかを分析しよう。逆にいえば、父兄の有する直接的、間接的要因におけるどのような属性が父兄をして体育教師を高く評定させ、いかなる属性が低く評定させているかを多面的・重層的に明るみに出そうというわけである。

解析の方法として林の数量化理論Ⅱ類による判別分析を用いた。

外的基準は標本数の確保という観点も含めて前述したグルーピングを採用した。説明変数としては、表11に示されているように12変数40カテゴリーをとりあげた。

外的基準としての二グループの判別に対して今回とりあげた12の説明変数の全体として説明力を示す相関比が.486とでているが、この種の調査ではほどほどの成績であるといえよう。外的基準を例えば1位~3位と7位~9位といったようにもっと対照性のあるグループで構成できる程の標本数の確保とか、説明変数の増加や精選ができれば相関比はもっと高くなるであろうが、この点は今後の課題にしておきたい。

表の見方でカテゴリースコアについてだけ説明しておきたい。表の下に記しておいたように、体育教師を1~5位に評定したグループ(以下上位グループと記す)の平均数値が.626、6~9位のグループ(下位グループ)が-.776となっているので、表中のカテゴリースコアが数直線上の両グループの平均数値のどちらの方向により近い位置にあるかによって、それぞれのカテゴリーが外的基準のどのグループにより寄与しているかが示される。

以下、規定力の強い変数の順にその具体的な規定の様相をカテゴリー別にみていくことにしよう。

①クラブへの父兄の態度と子の参加：父兄の態度に積極的、消極的とあるのは子どもに課外クラブへの参加をすすめているか否かであり、子の参加は実際に子どもが参加しているか否かである。

表11 高校体育教師の社会的地位を規定する要因の分析

～父母を対象にした林の数量化Ⅱ類による～

変数	カテゴリー	カテゴリ スコア	偏 相 関	変数	カテゴリー	カテゴリ スコア	偏 相 関
態ク 度ラ とブ 子へ のの 参親 加の	親積極的・子参加	.384	.369 *** ①	師望 のま タし い い ブ教	労働者型	.319	.238 ** ⑥
	親積極的・子不参加	-.631			聖職型	.207	
	親消極的・子参加	-.611			専門職型	-.324	
	親消極的・子不参加	-.368					
学 校 種 種	公立・体育	.810	.348 *** ②	運 動 の 好 嫌	好  き	.169	.222 * ⑦
	私立・普通	.036			嫌  い	-.770	
	公立・商業	.243			ど ち ら と も い え な い	-.364	
	公立・普通	-.316					
年 齢	35～40	.551	.299 *** ③	職 業	公 務 員	.445	.201 * ⑧
	41～45	.149			会 社 員	-.080	
	46～50	-.451			農・漁業	-.098	
	51～60	.212			主 婦	.190	
学 歴	中 学 校	-.032	.285 ** ④	担 任	気にする	.202	.167 ⑨
	高 校	.286			気 に し な い	-.174	
	短大・大学	-.496					
職 業 評 価 の 基 準	収 入	-.1268	.256 ** ⑤	子 女	男	.172	.111 ⑩
	特別の能力	-.171			女	-.091	
	社会的尊敬	.088		親	男	.068	.074 ⑪
	教育程度	-.169			女	-.100	
	社会的緊要度	.286			経 ク ラ 驗 ブ	有  る	
			無 い	-.078			

外的基準 1～5位 67人 平均数値 .626

6～9位 54人 〃 -.776

相関比 .486

\*\*\*...P<.001 \*\*...P<.01 \*...P<.05

両者の組合せで選択肢を構成している。

規定力は偏相関が.369で0.1%水準で有意。強い規定力をもっている。

カテゴリースコアによる具体的な規定の内容についてみれば、一つの特徴が浮かびあがってくる。それは父兄の態度と子の参加がくい違っているカテゴリー、「親積極的・子不参加」「親消極的・子参加」が強く下位グループに傾いている点である。それに比べると、自分もすすめているし子も実際に参加している「親積極的・子参加」型の父兄の体育教師に対するカテゴリースコアは、.384と上位グループに傾いてはいるもののそれ程の強さではない。

課外クラブへの親子のかかわり方において、両者に不一致がある場合に特に親の体育教師に対する職業的評定を低くしているといえよう。

②学校種：「公立・体育」がとび抜けて強く上位グループに傾いている。このように父兄の体育教師に対する評定が高いことから、その子弟の体育コースへの進学は大方の父兄の賛成を得ていることが推察されるであろう。

公立における「商業」と「普通」の間では前者が高グループに、後者が低グループに傾いている。

変数自体は「クラブへの親子のかかわり」に次いで偏相関.348と、危険率0.1%の強い規定力をもつ。

③年齢：全体の分布状況から年齢を表に示すような4段階にカテゴリー化した。特に目立つのは35～40歳、46～50歳であり、前者が上位グループ、後者が下位グループにそれぞれ強く傾いていることである。51～60歳を除くと、加齢に伴う評定の低下がほぼ直線的な傾向を示している。

偏相関が、.299と、ここまでが0.1%水準で有意な規定力を示す。

④学歴：「短大・大学」が-.496とはっきり下位グループに傾斜し、「高校」が.286と上位グループの方向に傾いている。「中学校」がその間にあって-.032と中立の位置を占めているが、高校進学率が90%を超すようになってきている状況を勘案するとき、学歴が高くなるにしたがって体育教師の職業的評定は低くなるという傾向が窺えるようにも思える。

偏相関でみて1%水準の有意な規定力を示す。

⑤職業評定の基準：「収入」がとび抜けて下位グループに効いている。職業の評定に際して「収入」を重視する父兄にとって体育教師は魅力のない職業にうつるようである。これに対して「社会的緊要度」が比較的に上位グループに傾いている。

要するに体育教師は、社会的にみて比較的に必要で欠かすことができないとみられながら、「特別の能力」や「教育程度」もそれほど必要とされず、社会的に受ける尊敬も高いとはいえず、「収入」にもめぐまれない職業とみなされているといえよう。

1%水準で有意な偏相関.256の規定力をもっている。

⑥望ましい教師のタイプ：教師の職業としての理想的なあり方は専門職としてのそれであるということがしばしば議論され、主張されるのであるが、ここにみる限り、体育教師はむしろ「労働

者型」ないし「聖職者型」として位置づけられているようである。

偏相関は.238で、1%水準で有意な規定力をもった変数となっている。

⑦運動の好嫌：体育指導における主要内容である運動に対する好嫌は体育教師の職業的評定に結びつくことは容易に予想されるところであるが、予想にたがわない結果がでたといえよう。

すなわち、「好き」「どちらともいえない」「嫌い」の順にカテゴリースコアは.169, -.364, -.770と直線的にきれいに並び、運動が嫌いである程、それに比例して体育教師の評定も低くなるといえるのである。

特に、運動が「嫌い」であることは体育教師の評定にとって決定的なマイナス要因になっていることが注目されよう。

変数の規定力としては偏相関.222で5%の有意性を示している。

⑧職業：二つの山ができており、他は特別な傾きを示していない。つまり、教師を含めた「公務員」は上位グループに傾いており、逆に、「商工・サービス業」は下位グループに傾いている。

5%で有意な規定力をもっている。

残された四つの説明変数は有意な規定力は示していない。担任「気にする」、子の性「男」、親の性「男」、クラブ経験「有る」が上位カテゴリーに、他の対カテゴリーが低位グループにそれぞれ傾いている。しかしながらその傾きの程度はわずかなものであり、はっきりした特徴として述べることはできない。

## おわりに

社会の進展につれて、社会を維持、発展させる機能はさまざまに分化してくる。労働面における機能の分化も著しく、それを体系的に分類、整理することが一つの学問領域を構成する程である。

ところで、労働面における機能の分化をわれわれは職業という次元で捉え、分類・整理することができるであろう。初対面の自己紹介においてほとんどの場合職業を含める程に、職業はわれわれにとって身近なものであり、またその人の置かれた境遇をよく表すものでもあるであろう。

さて、本研究においては、体育教師の社会的地位を明らかにする上で最も重要な意味をもつと思われる、職業としての体育教師の分析を試みてきた。体育教師の具体的な教育的営為や社会的期待を「職業」という次元で捉えることによって、本研究で既に分析されてきているように、他職種、他教師との比較検討がさまざまなレベルで可能になってくるであろう。

今回は、子どもを高校に通わせる父兄を対象にして、背後に潜んでいる職業観、価値観とともに、高校における体育教師の職業的地位を解明した。

他職業との比較における教師の職業的位置をみるために、学校段階によって教師を小学校、中学校、高校の三種に分類して示したことは、職業としての教師の実態を分析的に明らかにする上でま

ずは成功であったといえるであろう。それらの間には明らかに職業的地位の分化が認められたからである。

また、教科間における体育教師の職業的地位の解明も、「子どもの高校教師志望」を前提にしたものであったが、一応の傾向をつかむことができたように思う。

しかしながら、全体を通して分析・考察における粗さ、突っ込みの不十分さは覆うべくもない。

もっとも、職業としての体育教師の社会的地位を明らかにすることがわれわれの絶対的な目標でないことはいうまでもない。むしろ重点はどのような要因が働いてそのような地位に位置づかせているのか、その背後に存在する要因構造を明るみに出し、最終的には体育指導の改善に寄与することにならなければならないと考えている。このように、体育教師の職業的地位の解明は、そのことを通してみた社会のあり方の診断という側面を含み込まざるを得ないのである。

ところで、職業としての体育教師の社会的地位を明らかにするためには、もっと手を広げなければならないのはいうまでもない。対象において、子どもの父兄を中学校、小学校に広げることが可能であるし、また視点を変えれば、小、中、高、大における被教育者、さらに同僚教員などが浮かんでくるであろう。

むしろ明らかにされねばならない課題を明らかにしたことに意義が与えられなければならない程の研究、分析であったとも思うが、今後の研究の進展において補っていけたらと考えている。

## 註

- 1) 藤森成吉、「ある体操教師の死」日本プロレタリア文学体系 (1), 三一書房所収, 1955.
- 2) 宇土正彦、「戦後体育授業史の中のこぼれ話」体育科教育, 大修館書店, 1986. 4. 以下の号において連載中である。
- 3) 富永健一編, 日本の階層構造, 東京大学出版会, 1979. なお S S M は Social Stratification and Social Mobility の和制略号である。
- 4) 日本社会学会調査委員会編, 日本社会の階層的構造, 有斐閣, 1958.
- 5) 大橋幸, 「職業としての教師」河野重男・新井郁男 (編), 現代学校の構造, 現代教育社会学講座 4, 東京大学出版会, P. 107, 1976.
- 6) 1979年に実施された調査において, 鹿児島市内の高校生の父兄112人から得られた結果は, <聖職型>58.9%, <専門職型>29.5%, <労働者型>2.7%であった。
- 7) 別の調査によると, 「子供に就かせたい職業」として, 20の職業中, 「小学校の教諭」は「機械工業技術者」「医師」について第3位にあげられている。このような聞き方は, 子どもの能力も視野にいれざるを得ない評定であるが, 客観的な教師の評定とは違った意味で注目されてよい点であろう。注3)の422ページ。
- 8) 註6)の調査結果では, 数学, 国語, 英語, 社会, 理科, 体育, 技術, 美術, 音楽, 家庭の順になっている。
- 9) 註6)に同じ。「気にしない」46%に対して「気にする」54%であり, その内訳は「性格」35%, 「担当教科」14%, 「記録や業績」4%, 「出身学校」1%である。若干の違いは対象者の特性を反映したものと考えられる。
- 10) ちなみに註6)の同結果を示せば, 数学, 英語, 国語, 理科, 社会, 体育, 美術, 技術, 音楽, 家庭の順である。